

高木典雄*: 日本産蘚類植物報告 (7)

Norio TAKAKI*: Notes on Japanese moss flora (7)

43) 日本産レイシゴケ属 (*Myurella*)

本属の一種 *Myurella gracilis* (Weinm.) Lindb. が日本にも産することは既に報告されている。筆者は昭和 28 年夏、日本に於ける第二の高峰たる南アルプス、北岳 (3192 m) に登り、山頂附近の岩隙に更に他の 2 種 *M. julacea* (Vill.) Bryol. eur. 及 *M. tenerrima* (Brid.) Lindb. を新に発見し日本産本属に 3 種を数え得たのでこれらの検索表を作つて報告する。尚 *M. tenerrima* は現在、北岳頂上附近で見出しただけであるが、*M. julacea* は同山頂の他に同じく南アルプス仙丈岳の北斜面、^{ホウラク}崩落谷 (2700 m) と称する岩場にも生育しているのを見出すことが出来た。由来、南アルプスには、北、中央アルプス等にみられぬ興味ある蘚苔類を産することが注目されているが今回追加し得たこれらもその一つではないかと思われる。

日本産 *Myurella* 属の検索

- I. 莖は概ね直立し密な蘚座を作る。葉は密につき葉頂は円く、時に短尖頭になる。
*M. julacea*
- II. 莖は屈撓し、からみあつて疎な蘚座を作る。葉は疎につき葉頂は長く尖る。
- A. 葉背面の細胞膜にバピラあれど後者の如く著しからず。葉縁に微鋸齒あり。
*M. tenerrima*
- B. 葉背面に於て各細胞は中央に 1 個の棘状のバピラありて一見ツルレイシの果皮状、葉縁には鋭い鋸齒あり。
*M. gracilis*

Myurella julacea (Vill.) Bryol. eur. (1851).

Leskea julacea Schwaegr. in Schultes' Reise auf d. Glockner 2: 363 (1804).

Hab. Forming dense cushion in crevices of rocks in the alpine region about 3100 m above the sea level.—Mt. Kitadake, South Jap. Alps.

This species is a new addition to the flora of Japan.

カイガラゴケ (新称) (Fig. 20). 高さ 1~2 cm の密な蘚座を形成し上半は明緑色、下半は黄褐色を呈する。莖は葉叢状で不規則に数回分岐する。葉は乾、湿時ともに覆瓦状に莖に密着。葉形は円形~心臟形で深く凹彎し貝殻様、葉頂は多くの場合鈍円であるが時に短尖頭になることがある。葉背に於て細胞膜の角隅にバピラがあり、葉縁には細胞膜の凸出による微細な鋸齒がある。葉頂附近の縁細胞は屢々外側面の細胞膜を失つて

* 名古屋大学、教養部、生物學教室、名古屋市、瑞穂区。Biological Institute, Faculty of Culture, Nagoya University.

透明化している。中肋は殆んどあるかないかの程度。葉の中央部の細胞は菱形～六角形で配列は不規則。今回の採品中には子囊が見出せなかつた。

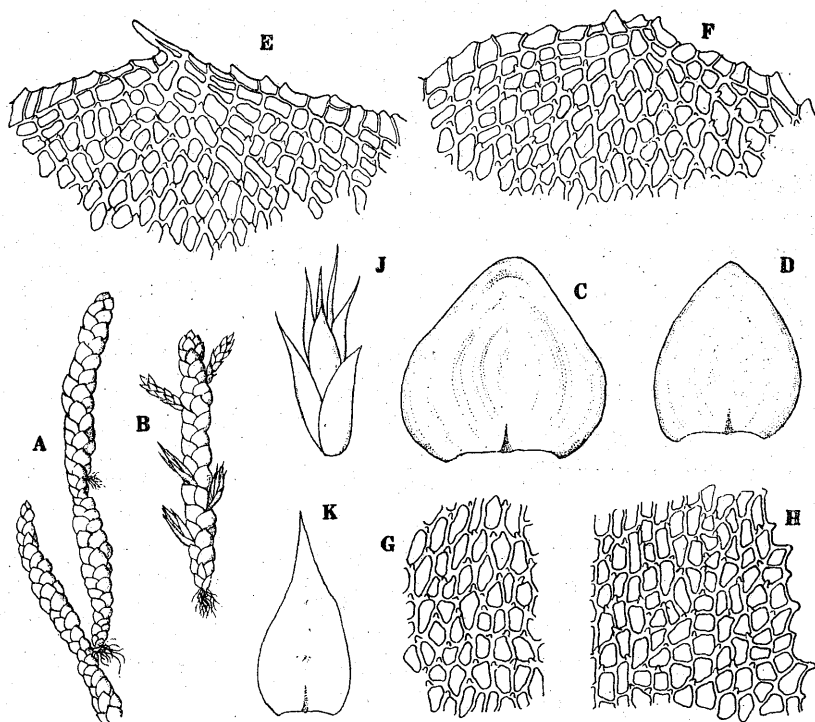


Fig. 20. *Myurella julacea* (Vill.) Br. eur.

A, B. Plants ($\times 12$). C, D. Leaves ($\times 60$). E, F. Apical parts of leaves ($\times 340$).
G. Cells from middle part of leaf ($\times 340$). H. Marginal part of leaf ($\times 340$).
J. Perichatall leaves ($\times 35$). K. ditto ($\times 58$).

採集地： 南アルプス；北岳頂上附近 (3100 m, 1953-VIII-8, No. 14409), 仙丈岳,
崩落谷 (2700 m, 1953-VIII-10, No. 14531).

分布： 欧, コーカサス, カシミール, 中央アジア, シベリア, 支那, 北米北部。

Myurella tenerrima (Brid.) Lindb. Musc. Scand. 37 (1879).

Pterigynandrum (?) *tenerrimum* Brid. Musc. Recent. Suppl. 4: 132 (1819)—
Isoetecium apiculatum Huebn. Muscol. Germ. 598 (1833)—*Myurella apiculata* Bryol.
eur. pl. 560 (1851).

Hab. Growing mixed with other mosses in similar habitat as that of

former, but forming rather loose cushions.

This species is also newly found in Japan.

トガリカイガラゴケ (新称) (Fig. 21). 本種は外観上は後者 *M. gracilis* に似て莖

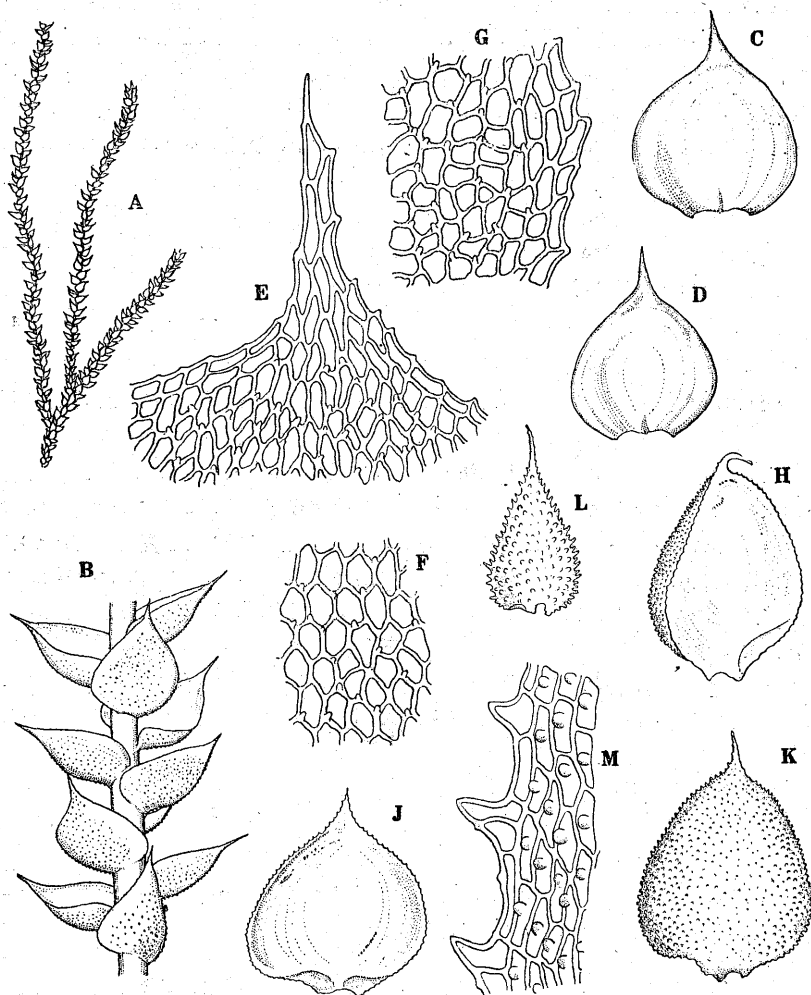


Fig. 21. A~G. *Myurella tenerrima* (Brid.) Ldb. H~M. *M. gracilis* (Weinm.) Ldb.
A. Plant ($\times 8$). B. Portion of stem ($\times 44$). C, D. Leaves ($\times 60$). E. Apical part of leaf ($\times 340$). F. Cells from middle part of leaf ($\times 340$). G. Marginal part of leaf ($\times 340$). H, J. Ventral view, K, L. Dorsal view, L. Upper leaf) M. Marginal part of leaf ($\times 340$).

は繊細でよく伸長しゆるくからみあつて疎な蘚座を形成する。然し色は一般に明るい黄緑色で *M. gracilis* の様に青味を帯びることはない。莖長約 2 cm, 莖頂は鞭状の細枝になることが多い。葉のつき方は非常に疎で乾燥時も開展している。葉は深く凹彎し先端は次第に狭く鋭尖頭をなす。葉縁に微鋸齒あり, 中肋は葉基部に痕跡程度。葉背細胞膜の角隅にバピラあり。本標品にも子嚢がない。外国産のものに比べ本標品は殊に枝が細長く伸び、且つ葉のつき方も疎になる傾向が強い。

採集地: 南アルプス; 北岳頂上附近 (3100 m, 1953-VIII-8, No. 14416).

分布: ラプラント, スカンジナビア, スコットランド, 欧州アルプス, グリーンランド, シベリア, 北米。

Myurella gracilis (Weinm.) Ldb. in Medd. Soc. p. Faun. et Fl. Fenn. 13: 354 (1886); Noguchi in Journ. Jap. Bot. 22: 84 (1948); Takaki in Journ. Hattori Bot. Lab. 10: 25 (1953).

Hab. On moist rocks in sheltered places; it is found in several localities all consisting of Paleozoic rocks.

レイシゴケ (Fig. 21). 本種は昭和 15 年服部新佐博士がはじめて武蔵水川町の石灰岩上で採集され、日本フロラへの新属種として野口彰博士が紹介されたもので、筆者はその後知られた新しい産地として南アルプス及び秩父等を報告した。最近になつて筆者は更に下記の地に於ても発見する事が出来た。今迄知られている日本での産地が何れも古生層の岩石であること、及び日本から得られる標品には殆んど子嚢をみないこと等興味あることである。石灰岩上に特によく見出されるが、それ以外の岩石に生育していることもある。葉の背面には棘状のバピラが密生し葉縁に鋭い鋸齒があるので区別は容易である。

新産地追加: 木曾御嶽山 (王滝口, 新滝附近, 1250 m, 1953-VIII-24, No. 13836), 越中黒部川溪谷 (釋平より祖母谷へ至る途中, 600 m, 古生層石灰岩 1953-X-13, No. 14731).

分布: 欧, シベリア, 北米。

44) *Tayloria splachnoides* (Schleich.) Hook. Jour. Sci. and Arts 2: 144 (1816).

Hookeria splachnoides Schleich. Catal. (1815).

Hab. On decaying logs in coniferous forest in the subalpine region.—Hirogawarapass, South Jap. Alpes.

This species is newly found in Japan.

スルメゴケ (新称) (Fig. 22). 南アルプス北岳の北方、広河原峠附近に於て岩月善之助氏によつて見出された日本フロラへの新品で、筆者も現地でその産状を観察することが出来た。欧州や北米等の高山に比べて日本の高山にはどういふものか *Splachnaceae* の属種に乏しく *Tetraplodon bryoides*, *T. angustatus* が広く産するのを除いては他に

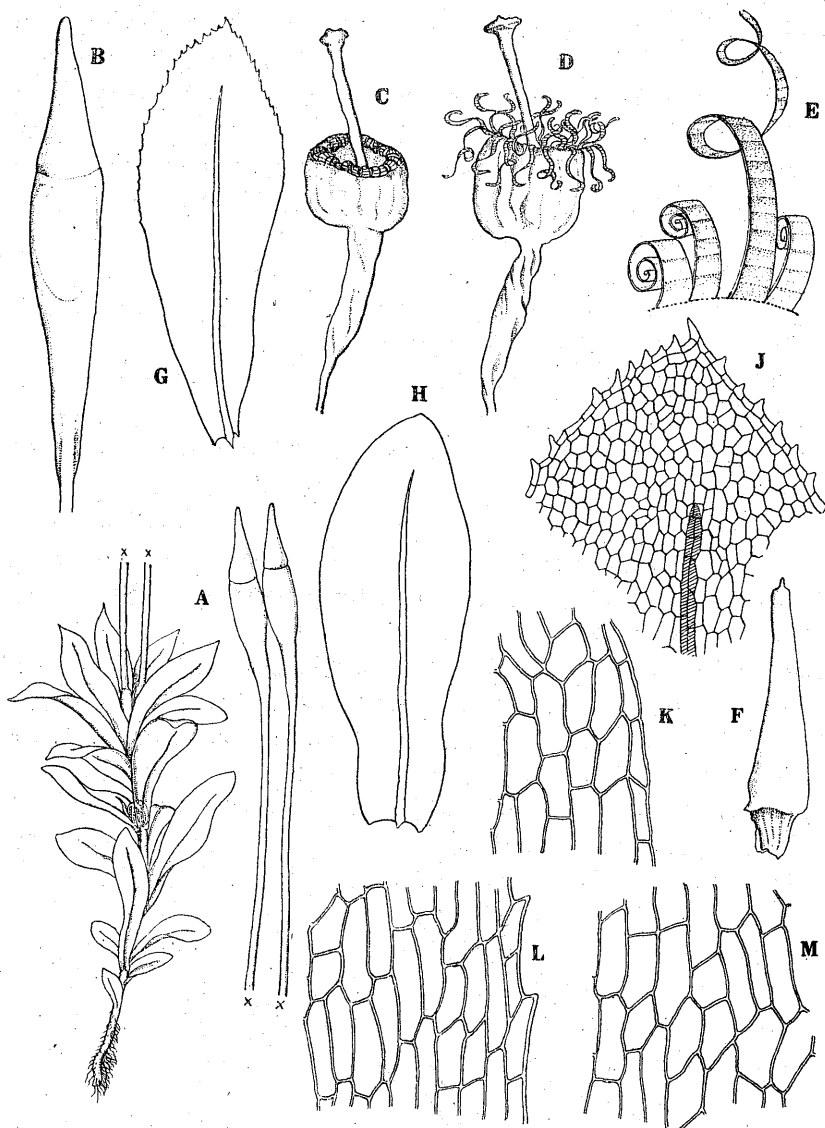


Fig. 22. *Tayloria sprachnoides* (Schleich.) Hook.
 A. Fertile plant ($\times 8$). B. Capsule with lid ($\times 13$). C. D. Deoperculate capsules ($\times 19$).
 E. Part of peristome ($\times 74$). F. Calyptra ($\times 19$). G, H. Leaves ($\times 13$). J. Apical part
 of leaf ($\times 44$). K, L. Marginal parts of leaves ($\times 120$). M. Cells from middle part
 of leaf ($\times 120$).

二三のものが報告されているのみである。今回やつとこの一種を追加することが出来た。本科のものには一般に高山乃至寒地の動物の死骸や排泄物等の上に生育するものが多いが、本種はトウヒ、オホシラビソ等よりなる針葉樹林内の腐朽しかかった倒木上に群生していた。子嚢に於ける柱軸と蒴菌は特異である。即ち柱軸は永存し乾燥した子嚢では子嚢壁のみが収縮し、柱軸だけが屢々棍棒状に長く突出する。蒴菌は単立してテープ状をなし 22 図に示す如く乾燥時は展開しているが湿りを帯びると急激に内側に巻縮する。この運動は乾湿の変化に極めて敏感で、検鏡しながら呼吸をかけるだけで展開、巻縮の運動を何回も繰返す事が出来る。その状あたかもスルメを焼く時の脚の動きに似て奇抜である。スギナの胞子にある弾糸の運動と同じ機構によるものと考えられる。葉は舌状をなし全縁のものと鋸歯あるものとある。

産地：南アルプス、広河原峠 (1950 m, 1953-VIII-9, No. 14462)。

分布：欧、北米北部。

今回発表の日本フロラへの新追加 3 種については野口彰博士よりも確認をして戴いたのでここに感謝の意を表する。

(続く)

○カワノリ伊豆半島に産す (千原光雄) Mitsuo CHIHARA: *Prasiola japonica* Yatabe found in Izu Peninsula.

カワノリ (*Prasiola japonica* Yatabe) の産地については、次々と報告があつて今では、かなり多くのところが知られるに至つた。カワノリの研究者である岡田喜一博士は本誌 14 巻 7 号 (1938) の報告で当時までにわかつていた産地として北は栃木県塩原 (箒川) から南は熊本県八代郡五家荘 (球磨川) に至る太平洋斜面の幾つかの河川の上流地域を挙げ、そしてそれらの産地から考察して房総、三浦、伊豆、紀伊の諸半島と中国地方及び日本海沿岸に知られていないことは分布上興味ある点と述べておられる。然るにその後、小清水卓二博士は紀伊半島大台ヶ原本沢川に産することを報告された (本誌, 27: 72, 1952)。

ところで伊豆半島に於ては少くとも藻類学者の間ではその産否が全く未知であつた。私は 1952 年秋、伊豆半島天城山麓の河津川流域の藻類採集を試みた際、カワノリが多数生育しているのを見ることができた。この川は天城山系に端を発し南伊豆の海に注ぐもので、生えているところはその上流、七瀬附近である。その後、訪れたときもやはり見ることができた。そこでこれを持ち帰り培養したり顕微鏡で観察したりして検討した結果、全く *Prasiola japonica* Yatabe に当ててよいことがわかつた。このものは、その土地では早くから食用として利用されていたとのことであるから、ある人達の間では既に知られていたことであるかもしれない。しかし上述のようなカワノリ産地発見の過程から考えてここに報知した次第である。

(東京教育大学下田臨海実験所)